



2段吊り上げ・シーソー方式によるイチゴの増収・省力・省エネ生産システム

## 今後の農業技術開発の方向

塩水に浸した稲もみの浮き・沈みにより良い種子を選ぶ「塩水選」が、我が国科学農法の第1号といわれている。開発されたのが明治15(1882)年である。以来、戦後の食糧危機を救った水稻の「保温折衷苗代」など、節目節目で技術開発が大きな役割を果たしてきた。

農業は絶えず変化する気象等の自然条件のもと、また作物という生物を相手に、作物の姿を見ながら微妙な判断のもとに営まれてきた。その結果、いわゆる名人芸の域に達する篤農家による精農技術も生まれてきた。

いま、本県農業従事者の著しい高齢化を思うと、新規就農者等を確保していくためには、篤農家による精農技術とはやや対極的ともいえる、未経験者でも取り入れやすい生産技術の単純化・簡易化や軽作業化という視点も考慮した技術開発も重要と考えている。このため、当センターでは、産学官の連携、

即ち、農業関連分野での大学や他の研究機関との共同研究にとどまらず、特に異分野の民間の力を借り、技術の単純化・簡易化や省力軽作業性等の共同研究を、更に強化し始めたところである。

さて、本県では、大学や民間等有識者で構成される広島県研究開発推進会議において「県立試験研究機関のあり方」が論議され、昨年11月に最終提言が出された。この提言を踏まえ、県立試験研究機関の取り組むべき方向等が中期業務計画(平成16~18年度)として策定された。食の安全・安心が問われ、健康と安らぎが求められる時代へ対応する技術開発、広島らしさを生かす技術開発等に当センターが深く関わっていくことは使命と考えている。

これらの方向のもとに研究に取り組むとともに、研究は現場や地域に生かされてこそ成果であることを改めて肝に銘じて、取り組んで参りたい。

所長 肥後 守

## ブドウの新梢を均一に配置する摘心技術

ブドウ栽培において、新梢伸長量を揃えるために慣行の芽かぎ処理等を行っても、発芽が早かった新梢は強勢となる場合があります。そこで、短梢剪定栽培で、主枝に長さの揃った新梢を確保するための枝梢管理法を開発しました。

弱い新梢は、花穂の除去および芽かぎについて慣行の管理を行い、主枝1m当たり12本の新梢を残します。

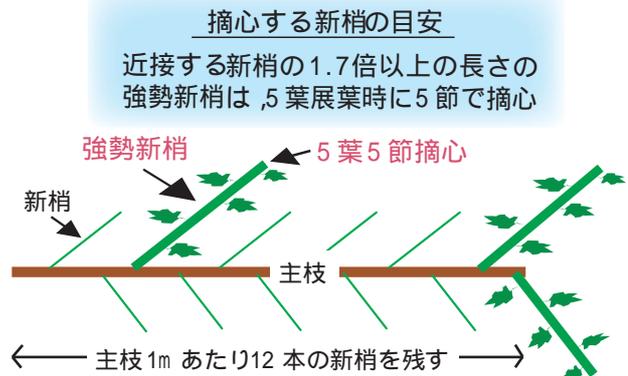
発生する新梢の長さを揃えるため、近接する新梢（前後2新梢）より1.7倍以上伸長している強勢新梢を、5葉展葉時に5節で摘心します。

摘心する新梢は、強勢な新梢のみとし、多くても全新梢数の4分の1程度にとどめます。

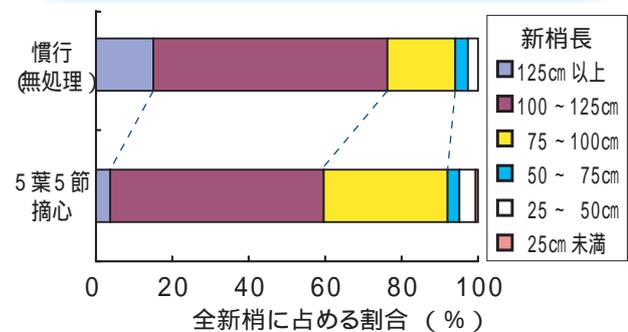
摘心後に発生する副梢は7枚で摘心し、副梢から発生する副々梢は1枚で摘心します。

以上の処理で、主枝に長さの揃った新梢を確保できます。

（落葉果樹研究室）



5葉5節摘心により新梢の長さが揃います



## ナシ「愛甘水」の優良果実生産技術

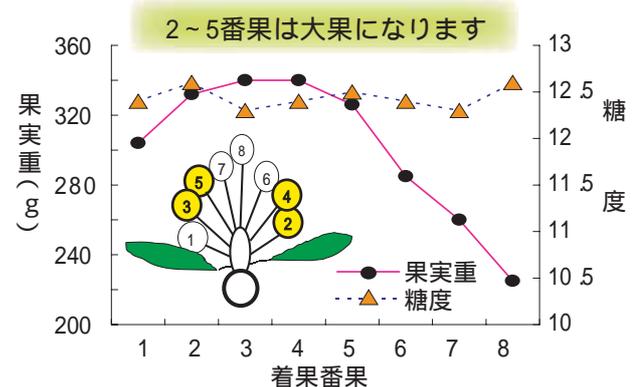
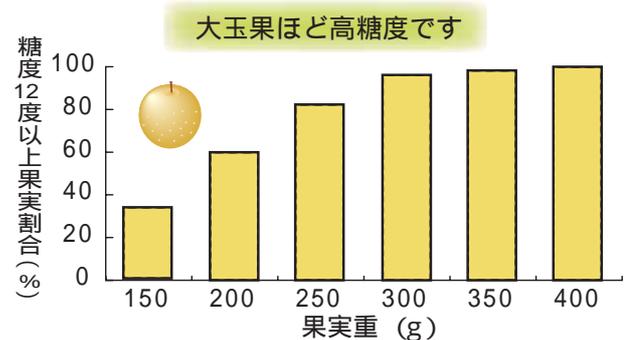
ナシ「愛甘水」は、盆前の有利販売可能な有望品種として栽培されていますが、小玉果や低糖度果実が混入するなど果実形質のバラツキがみられます。この問題の解決のためには、下記の点に留意してください。

糖度12度以上の果実を生産するためには、果実重が300g以上の果実を生産目標とする必要があります。

結果枝は果実重が大きく、糖度が高くなる短果枝を使います。また、側枝の背面から発生した短果枝は、果実重が小さく糖度が低くなるため利用しません。

着果番果は、糖度に差はありませんが、安定して大玉となる2~5番果を使います。

（落葉果樹研究室）

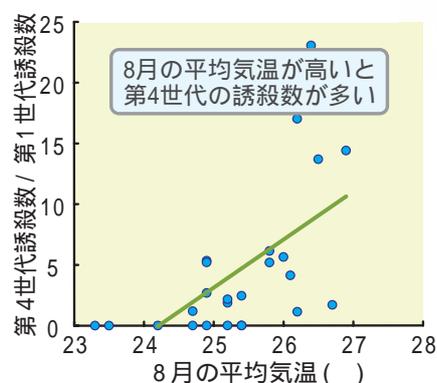
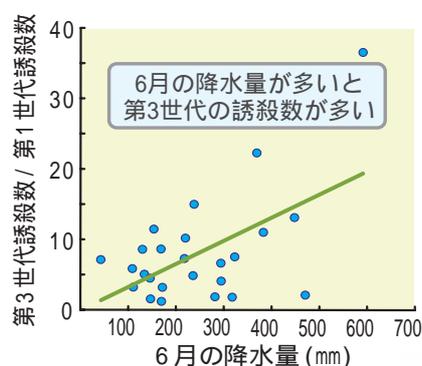


## ハスモンヨトウの被害程度予測

従来は、性フェロモントラップへのハスモンヨトウの誘殺数から発生時期を予測することは可能でしたが、秋期における被害程度の予測は困難でした。そこで、1979～2003年の誘殺データを解析した結果、第1世代(4月～7月上旬)の誘殺数がわかれば、秋期の誘殺数やダイズの被害程度を予測することが可能となりました。

6月の降水量が多い年は第3世代(8月中旬～9月中旬)の誘殺数が多くなり、8月の平均気温が高い年は第4世代(9月中旬以降)の誘殺数が多くなる傾向があります。第3世代の誘殺数が多い年はダイズでの被害が多く、第4世代誘殺数が多い年は野菜や花での被害が多くなる傾向にあります。

(環境制御研究部)



## 果樹カメムシの発生予測

果樹を加害するカメムシ類は、年によっては大きな被害を出しますが、果樹園外から夜間に飛来するために虫を発見するのが難しく、防除が困難でした。

そこで、カメムシが越冬している落ち葉での越冬調査や集合フェロモントラップを利用した調査でカメムシの発生量を予測する方法を検討しました。

落ち葉での越冬量とその年のナシでの被害量は同様の傾向を示し、越冬量が多い年はナシ園でカメムシ被害が多いことが判りました。また、7月上旬頃からカメムシが急激に集合フェロモントラップに多く捕まれば、ナシ園でカメムシ被害が多くなることが判りました。

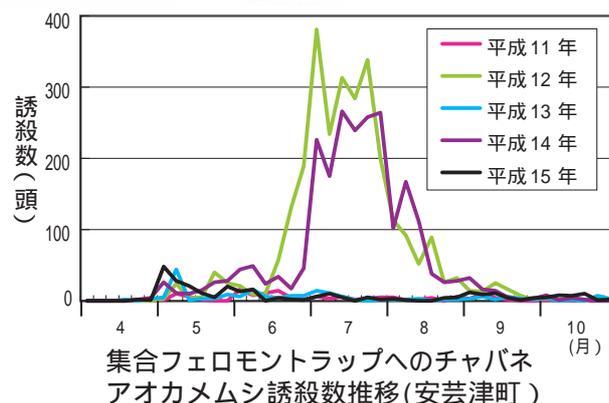
(落葉果樹研究室)



チャバネアオカメムシの成虫



集合フェロモントラップ



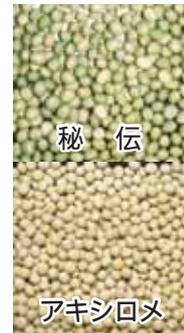
集合フェロモントラップへのチャバネアオカメムシ誘殺数推移(安芸津町)

## 農産物種子の貯蔵施設「農業ジーンバンク」を紹介します

(財)広島県農林振興センター農業ジーンバンクは、遺伝資源の保存と再利用を目的に平成元年に設立されました。貯蔵種子点数は約18,000(稲類:7,600,麦類:2,900,豆類:1,600,雑穀・特用作物:1,000,飼料作物:2,400,野菜類:2,500等)です。研究機関以外での昨年度の利用点数は豆類,野菜類を中心に135点でした。今後も積極的に御活用ください(TEL & Fax 082-429-2599)。

### ジーンバンクで保存している特徴のある品種(8) - 絶品の枝豆「秘伝」 -

「秘伝」は岩手県で古くから栽培されている絶品の枝豆用品種です。豆の種皮色,子葉色は共に淡緑色,100粒重は45g前後と大型で豆の外観も良いです。早晩生は中～中晩生に属します。枝豆として栽培する場合,本県中部地帯では6月中旬～7月上旬播で9月中旬～10月上旬の収穫となります。畦巾70cm,株間20cm,1か所2粒播きを基準とします。この時の茎長は70～80cm,莢が大きい割に着莢数が多く,濃い緑色で白毛の大莢が連着した状態は見事です。枝豆はジューシーで香りと甘みに富み,歯切れが良く豆が大きいだけに食べごたえがあります。この時期の枝豆としては,以前に紹介した新潟県の在来品種「いなよ」と双璧です。  
(農業ジーンバンク:船越建明)



## 研究成果発表会へのご来場ありがとうございました

3月12日に「環境の時代」の「農」を考えるをテーマとして研究成果発表会を開催しました。今年から趣向を新たに,最新研究成果の口頭発表,ポスター展示,圃場見学を設け,また,現場移転事例や関連行政施策を紹介し,研究開発から産地への技術移転までを一体的に考える内容としました。約200人のご来場を得て,盛況のうちに終了することができました。ご来場いただいた皆様に研究成果の活用をお願いするとともに,産地紹介等にご協力いただいた方々に厚く御礼申し上げます。



## ようこそ農業技術センターへ (1～3月の来所者紹介)

2月16日～25日:安芸津中学校1年生19名が,果樹研究所へ職場見学に来られました。県農業,果樹部門の現状と農技C果樹研究所の仕事内容の説明をし,中晩柑の新品種紹介と5品種の試食を行いました。アンケートの結果,「春峰」(清見×水晶ブント)の爽やかな風味が生徒に好評でした。

3月19日:JA尾道市甲山営農センター職員と甲山町の農家10名の方および口和町・黒瀬町の農家の方が,「当センター生物工学研究部実験室施設利用規程」によるタラノキの組織培養による苗生産技術を習得するために,施設の見学に来られました。甲山町では今後,培養技術を習得し,現地に導入する予定です。

視察・見学等は随時,全所で受け付けています。お気軽にお問い合わせください。

## 人事異動

【転入・新任・所内異動】総務課主任専門員:但馬妙子,同主任専門員:福田正雄,同専門員:藤井雅英,同:中野守,業務課主任専門員:吉川静美,同主任技術員:藤田義弘,同:三浦泰宏,企画情報部主任企画員:古土井妙子,同:池田好伸,土地利用研究部長:松浦謙吉,同主任研究員:上原由子,花き栽培研究部研究員:田部大,環境資源研究部長:若山譲,生物工学研究部主任研究員:長久逸,同研究員:松下修司,果樹研究所管理課長:梅木繁男,同専門員:永末浩二,同主任主事:片上幸恵,同落葉果樹研究室研究員:浜名洋司,同柑橘研究室長:松本要,同主任研究員:赤阪信二

【転出】総務課専門員:錦織典章,同主任:古本みゆき,企画情報部専門技術監:土屋隆生,同主任専門技術員:山崎隆生,同:阿草孝,同:大木健一,同:香川和久,同:旗手祐二,同専門技術員:新田浩通,土地利用研究部副主任研究員:大川浩史,野菜栽培研究部研究員:岡田牧恵,花き栽培研究部研究員:藤原朋子,同:藤田暁子,生物工学研究部:金谷新作,果樹研究所管理課:伊藤智之,同柑橘研究室研究員:松本謙一郎

【退職】井上敏信,新谷美子,立川武司,竹下節子,中谷宗一,古土井悠

## 編集後記

れんぎょうが,しなやかな枝いっぱい黄色い花をつけ,農作業も忙しい季節を迎えました。

人事異動もあり,新年度のスタートです。今年度も現場に役立つ技術情報をタイムリーにお届けします。ご意見ご要望をお聞かせください。

## 農業技術センターだより No.74 平成16年4月1日

発行 広島県立農業技術センター  
〒739-0151 東広島市八本松町原6869  
Tel 082-429-0521 Fax 082-429-0551  
果樹研究所 Tel 0846-45-1225  
柑橘研究室 Tel 0848-68-0131  
<http://wwwarc.f-net.naka.hiroshima.jp/>  
e-mail: [ngckikaku@pref.hiroshima.jp](mailto:ngckikaku@pref.hiroshima.jp)



この印刷物は環境にやさしい再生紙を使用しています。



この印刷物は環境にやさしい植物性大豆油インキを使用しています。